調査報告

首　里　の　石　敢　當

上江洲　　均

宮　城　篤　正

1.　はじめに

「石敢當」がいつ、どこから入ったかということについて、正否は別として閩人三十六姓と共に中国から来ただろうとする意見は多い。しかし、それ以前から石に対する呪物崇拝があって、その上に「石敢當」信仰がかぶさって現在まで残ったのだろうといわれている。（須藤利一『南島覚書』、柳田国男『海南小記』）

古来、T字型道路や十字路は百鬼の横行する場所と考えられ、道の突当りに「石敢當」を立てることにより、それらの邪鬼を払うものと信じて来た。「石敢當」の由来についても説が分かれるようである。①中国古代の力士の名で、その名にあやかって邪鬼を払う。②「石敢て當る」の意で、石の持つ堅固な性質からの連想が基となっている、の二説がふつう言われている。

「石敢當」は「イシガントウ」と読み、『南島覚書』によれば、中国語の「シーカンタン」(Shih-kan-tang)によるのだろうということである。(金関博士の説としてあげている。) ただしかし、台湾・中国が文字や規格を忠実に守っているのに対し、沖縄は文字の間違いが目立つようである。「石巌当」や「石散当」などの間違った字を当てているのは、「文字を尊重しなかったせいばかりでなく、文字のマジックが大して問題にならぬほど、岩石のマナに対する信仰がより強かったためであろう」としている。

沖縄においては、久米村を経て首里、那覇の支配層から発し、地方農山漁村まで浸透したと思われるが、首里において現時点でどれくらい残り、行われているかをごく大ざっぱな調査をしてみた。調査方法は、所在地、所有者名を行って調べ、由来を聞き、写真撮影と寸法を記録するに終始した。調査月日と調査地はそれぞれ下記のとおりである。

調査月日……昭和50年2月19日から3月中旬までの合計9日間。

調 査 地……山川町、桃原町、儀保町、平良町、赤平町、汀良町(1丁目だけ)、当蔵町(3丁目除く)、池端町、真和志町、大中町、寒川町、金城町。

なお本土においては、九州にもっとも多く、京都、東京まで分布し、まれには秋田あたりにまで見られたということである。（写真1）

写真1　大阪住吉大社の石敢當
（琉球新報社提供）

（うえずきん・沖縄県立博物館学芸員）
（みやぎとくまさ・沖縄県立博物館学芸員）

2. 調査結果の概要

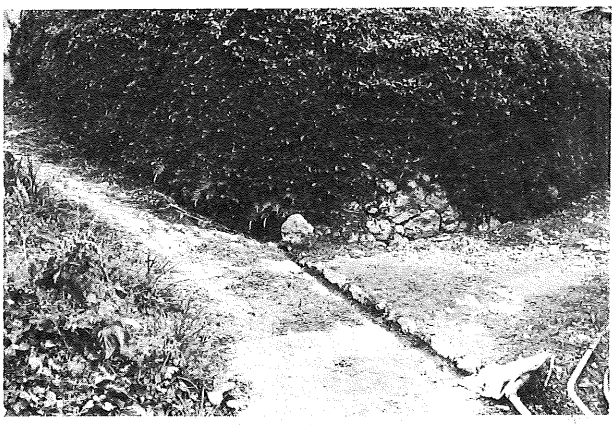


写真２　無銘の石敢當（金城町）

首里はもともと石垣と石畳の街で、立派な「石敢當」が多かったと思われるが、戦災でかなり破壊されたようである。古いものといえば、微粒砂岩岩塊（俗称ニービの骨）という石が大部分で、たまには凝灰岩、石灰岩の例もある。最近はブロック塀になった関係で、コンクリートに文字を彫って立てたり、塀に文字を刻みつけたりする例が圧倒的に多く見受けられ、板に書いたのも多い傾向にあることがわかった。ブロック塀に左官に刻ませたのはまだよい方で、ペンキ書きののもある。コンクリート彫りこみのものを購入して立てた例が20例ばかりあって、しかもここ２、３年来の新しいものがほとんどであった。

「石敢當」は道の突き当りや不定形な十字路などに立てるが、中には門が奥まったところまで続き、袋小路のようになっているばあいは、屋敷内に立てたのも数例見た。また例外的に立てているのが３例あって、それぞれ次のように説明している。

1. 道の突当りでないが、周囲にみならって自作した。（渡名喜島出身――山川町）
2. 道の突当りでないが、新しく求めた家屋敷なので立てた。（鳥堀町出身――平良町）
3. 坂道のため車が入らない。葬式のときは下から棺を持って来てここで霊柩車にのせる慣わしになっているので、悪風返しのつもりで立てた。（金城町）

また最近立てたもので、その立てた理由として「家族のだれかが病気がちで、モノシリの所へ行ったら、道の突当りにある屋敷のため、立てるように言われて。」というのが数例あった。

文字としては「石敢當」が圧倒的に多いが、一例だけ「泰山石敢當」があり、数例だけ「石巖當」「石巖当」がある。微粒砂岩系の石などを用いた古いタイプの「石敢當」をより多く残している所は、金城町である。数の上では山川町が多い。特に下に位置する２丁目、３丁目には新しいタイプの「石敢當」が多い。しかもそこは地方からの移住者が多く、調査対象の中にも８人の地方出身者が含まれている。かつて政治文化の中心であった首里は、古くから必ず石を用い、正確な文字を刻みこんでいたのが、安易に入手できる材料を用いるとともに文字に対するきびしさも欠けたようで、新しいのに間違いが多い。

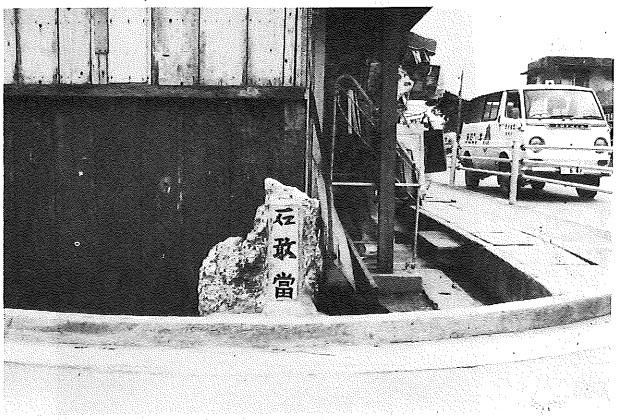


写真３　購入して立てた石敢當（池端町）

「石敢當」の数の多い少ないは、信仰心とも比例するだろう。しかし、もうひとつには地形が悪く、しかも道路の不整備で、まっすぐ

に伸びる道路が少ないことを意味する。しかし、当然立つべきはずのところに今はないばあいが多く、忘られつつあることもたしかである。道の突当りが気になるのであれば、われわれの調査した 130 箇は200にも 300にもなるはずである。

なお、赤田、崎山、鳥小堀のいわゆる三箇(さんか)はじめ、他の町まで調査を及ぼすとまだかなりの数にのぼるだろうが、ここでは調査日数の関係もあって省略し、次回にゆずることにする。

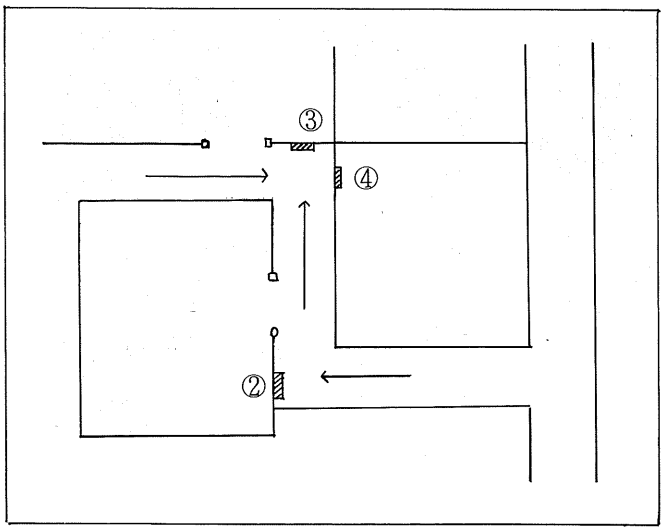


図1　石敢當設置の1例（山川町3丁目）
（数字は「代表的な石敢當」の(2)(3)(4)の石敢當をあらわす）

材質／町名	微粒砂岩岩塊	琉球石灰岩	アワ石状石灰岩	トラバーチン	凝灰岩	トタン	コンクリート(独立)	ブロック塀	板	プラスチック	合計	備考
山川町	6	1	・	1	・	1	13	3	4	1	30	
桃原町	2	・	・	・	・	・	1	7	・	・	10	
儀保町	3	・	・	・	・	・	2	1	・	・	6	
平良町	3	・	・	・	・	・	6	2	・	・	11	
赤平町	2	・	・	・	・	・	1	1	・	・	4	
汀良町	1	・	・	・	・	・	2	・	・	・	3	1丁目だけ
当蔵町	4	・	・	1	・	・	3	・	2	・	10	3丁目除く
池端町	1	・	1	・	・	・	4	・	1	・	7	
真和志町	4	・	・	・	1	・	2	2	3	・	12	
大中町	1	・	・	・	・	・	6	5	3	・	15	
寒川町	1	・	1	・	・	・	・	・	・	・	2	
金城町	9	2	1	・	1	・	6	1	1	・	21	
合計	37	3	3	2	2	1	46	22	14	1	131	

表1.　町別及び材質別石敢當数

3.　代表的な石敢當

〈調査項目〉

a 、所在地

b 、所有者

c 、材質

d 、寸法

e 、形態的特徴及び設置年代

(1) a、山川町1の67
b、饒波恒雄
c、微粒砂岩岩塊(俗称ニービの骨)
d、高さ30cm、幅17cm、厚さ8.5cm
e、所有者はこの屋敷に移り住んで3代目。昔は座波という人の屋敷で、そのころからのものだろうという。文字が磨滅しかけている。門の側に立つ。

(2) a、山川町3—31
b、金城珍寿
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ71cm、幅24cm、厚さ13cm
e、路地の突当り、生垣の前に立つ。

(3) a、山川町3—24
b、平良敏
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ56cm、幅36cm、厚さ12cm
e、宮古出身者。10年前に隣りの松川から移った時からあった。ブロック塀の前にもたせかけている。「敢」と「當」の字に特徴がある。

(4) a、山川町３―20
b、長堂ヤスエ
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ68cm、幅18cm
e、石垣にはめこんでいる。古くからのもの

(5) a、山川町３―11
b　又吉正敏
c、琉球石灰岩
d、高さ35.8cm、幅24.7cm、厚さ15.5cm
e、コンクリート壁の外に立てかけている。戦前のものという。

(6) a、桃原町１―23
b、佐久本嘉保
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ48cm、幅34cm、厚さ12cm
e、古いもの。４年ほど前に屋敷内から捨った。６年前に現在の屋敷内に移り住んでいる。

(7) a、桃原町２―32
b、金城次郎
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ60cm、幅37cm、厚さ10cm
e、古いもの。屋敷は道の下。屋敷の隅に拝所（屋敷神）があり、その上方に立てている。

(8) a、儀保町２―10（玉城朝薫産井付近）
b、比嘉ヨシ
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ66cm、幅48cm、
e、戦前からあった。「當」の字未完成。

(9) a、儀保町４―34
b、知念幸純
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ45cm、幅35cm、厚さ７cm
e、古いもの。戦災により「石」の字の部分が破損。最近見つけて来て立てた。板塀にもたせかけてある。

(10) a、儀保町２―35
b、我如古盛和
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ25cm、幅23cm
e、古いもの。「當」の字は埋もれて見えない。石垣の下方にはめこまれている。

(11) a、平良町２―54
b、当山太朗
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ63cm、幅36cm
e、昨年の夏立てた。門の脇のブロック塀にはめこみ。墓地からの道に向ける。

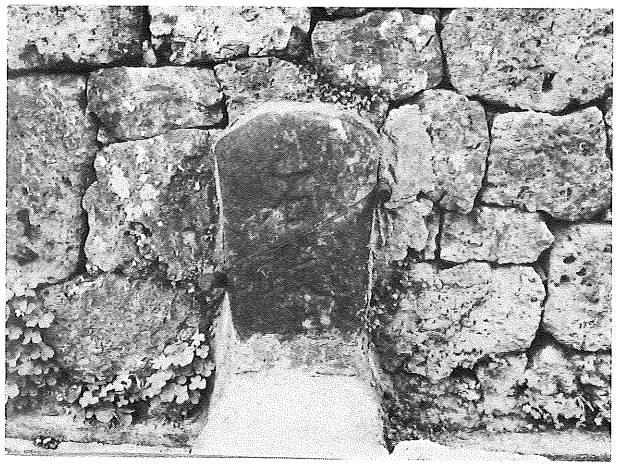
(12) a、平良町１―97
b、友寄賢二郎
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ48cm、幅28cm、厚さ10cm
e、２年前から。15年前に南風原村から移り住む。ブロック塀に立てかけている。

(13) a、平良町２―88
b、新垣盛幸
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ56cm、幅34cm、厚さ８cm
e、10年前に屋敷を買って移って来た。文字はないが、道の突当りになるので、そのつもりで前の人が立てたのだろうという。

(14) a、赤平町１―29
b、浜元朝功
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ36.5cm、幅20cm、厚さ18cm
e、門が奥深く、袋小路のようになっているので門内に立てる。古いもの。

(15) a、汀良町１―１
b、喜名
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ34cm、幅25.7cm、厚さ8.5cm
e、大きく書いた「石」の一字だけ見える。下二字は折れたのか不詳。古くからここにある。

(16) a、当蔵町２―68―２
b、宮平良真
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ110cm、幅26cm、厚さ約17cm
e、「泰山石巌當」と刻まれている。ところが「泰山」の二字は削りとられている。門の脇、ブロック塀にはめこんでいる。



(17) a、当蔵町1―19
b、大城秀一
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ45cm、幅25.5cm、厚さ10cm
e、古いもの。戦後この屋敷に住むようになってから見つけて来て立てた。「當」の字が見えない。

⑱ a、当蔵町２―62
b、渡ケ次柴本
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ47cm、幅28cm、厚さ12cm
e、板塀の前。古くからここにあった。

⑲ a、当蔵町１―11
b、新城
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ32cm、幅18cm、厚さ６cm
e、トタン塀にもたせかけて立てている。

⑳ a、池端町64
b、亀谷長松
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ93cm、幅28.5cm、厚さ17cm
e、玄関脇に立てている。古いものを見つけてもって来た。20年くらいになる。

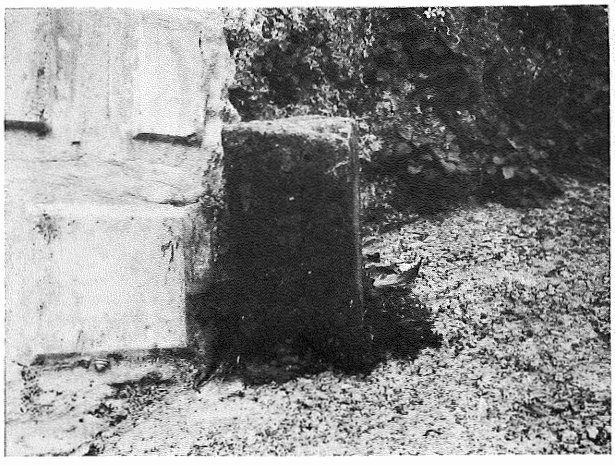
(21) a、真和志町１―31
b、宮城玄盛
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ33cm、幅52cm
e、「石敢」２字がない。古いものだが戦災で破損。

(22) a、真和志町１―22
b、名嘉山兼英
c、凝灰岩
d、高さ50cm、幅20cm
e、古くからあった。現在はブロック塀にはめている。二ケ所からの道の突当りになるので、両方に向く感じで立てている。

(23) a、真和志町１―11
b、宮里ミツ
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ54cm、幅27cm、厚さ13cm
e、板塀の外、虎の尾に生えている中に立つ。貸家の裏側で、戦後借りた人が立てた。

(24) a、真和志町２—15
b、宮城三郎
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ48cm、幅19.5cm、厚さ8.5cm
e、戦前は石垣にはめていた。今はブロック塀の外に立てかけ、路地へ向けている。

(25) a、真和志町２—10
b、志慶真元栄
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ39.5cm、幅26cm、厚さ10cm
e、古いもの。ブロック塀にもたせかけている。戦前から石垣にはめてはいなかった。



(26) a、金城町２—24
b、津波正次
c、凝灰岩
d、高さ34.5cm、幅16cm、厚さ17cm
e、家の前に菜園があり、その前へ立てている。昔ものだが、ここへ立てたのは戦後。

(27) a、金城町２―57（潮汲（ソンガー）井付近）
b、具志堅古吉
c、琉球石灰岩
d、高さ31cm、幅25cm、厚さ15cm
e、文字なし。戦前からのもの。屋敷の南に菜園があり、その外、道の突当りにある。

(28) a、金城町２―65
b、吉田兼哲
c、琉球石灰岩
d、高さ31cm、幅23cm、厚さ11cm
e、戦後大宜味村から移って来て住んでいる。昔からここにあったそうだ。

(29) a、金城町３―65（文化財「石畳道」に面す。）
b、屋良朝永
c、微粒砂岩岩塊
d、(左)高さ53cm、幅28cm、厚さ14cm
(右)高さ35cm、幅40cm、厚さ11cm
e、古いもの。右は上２字は戦災で破損。

(30) a、金城町３―51（「石畳道」付近）
b、長嶺将明
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ55cm、幅30cm、厚さ14cm
e、古いもの。長い門の奥。戦後少し後へ移した。文字は線彫りにし、形は石碑に似る。

(31) a、金城町３―50（「石畳道」通り）
b、真喜屋実映
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ48cm、幅32.5cm
e　石垣にはめこみ。古いもの。

(32) a、金城町２―36（「石畳道」通り）
b、新垣安昭
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ54cm、幅48cm
e、古いもの。石垣にはめこみ。

(33) a、金城町３―28
b、新垣盛吉
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ62cm、幅21cm
e、古いもの。石垣にはめこみ。(34)のものと相対している。

(34) a、金城町３―54
b、新垣恒篤
c、微粒砂岩岩塊
d　高さ45cm、幅22cm、厚さ８cm
e、屋敷の後方、石垣の外に立てている。(33)と相対している。

(35) a、金城町３―43
b、新垣恒秀
c、微粒砂岩岩塊
d、高さ46cm、幅21cm
e、古いもの。右の石垣下にはめこんでいる。左側の角にも石垣にはめた石があって家人は「石敢當」だといっているが、無文字である。

4. いろいろな石敢當

石敢当
石敢當
石敢当
石敢當
石敢當
石敢當
石敢當
石敢當
石敢當
石敢當
石敢當
石敢当
石敢當
石敢当
石敢當

石敢當関係文献抄

1.	南島覚書	須藤利一		P127～133、P134～139
2.	沖縄県国頭郡志	島袋源一郎		P294～295
3.	思出の沖縄	新崎盛珍		P301～304
4.	沖縄一千年史	真境名安興		P326～327
5.	童景集	東恩納寛惇		P67～68
6.	琉球千草之巻	慶留間知徳		P19
7.	琉球百話	島袋源一郎		P84～85
8.	沖縄の民具	上江洲均		P322
9.	八重山生活誌	宮城文		P５～６
10.	琉球史辞典	中山盛茂		P28
11.	南島叢考	宮良当壮		P186
12.	久志村誌	玉城定喜		P267
13.	北谷村誌	真栄城兼良		P269～270
14.	伊是名村誌	中本弘芳		P235～236
15.	国頭村史	宮城栄昌		P64
16.	民俗学辞典	民俗学研究所編		P23
17.	琉球之研究	加藤三吾		P153
18.	定本柳田国男集第１巻	柳田国男		P281～283
19.	宮古史伝	慶世村恒任		P136
20.	石敢当の研究	西村真次		1930年
21.	首里・那覇の風俗	宮里朝光	『那覇の今昔』	P197～198
22.	石敢当	黒岩恒	人類雑誌154号	
23.	石敢当	『琉球学術調査報告』第１集		P33～60
24.	赤い屋根・石垣・石敢当	大川清	世界の旅、日本の旅	P94～97
25.	石敢当について	陳哲雄	沖縄タイムス	S40．11．23～24
26.	水石と石敢当	山城正利	沖縄タイムス	S41．10．14
27.	沖縄の習俗と信仰	窪徳忠		P40～71
28.	比嘉春潮全集	第１巻		P521
29.	比嘉春潮全集	第２巻		P133
30.	石敢当考	三島格	『民俗台湾』２の11	
31.	南島探験	笹森儀助		P472
32.	ひるぎの一葉	岩崎卓爾	『日本庶民生活史料集成』第１巻	P417
33.	沖縄の民俗資料	第１集	琉球政府文化財保護委員会編	
34.	シマの話	佐喜真興英		